

博士學位論文審査報告書

大学名	早稲田大学	
研究科名	スポーツ科学研究科	
申請者氏名	岡田 功	
学位の種類	博士（スポーツ科学）	
論文題目	五輪スタジアムのホワイト・エレファント化を防ぐには Key Factors to Prevent Olympic Stadiums from Becoming White Elephants	
論文審査員	主査 早稲田大学教授	松岡宏高 Ph. D. (オハイオ州立大学)
	副査 早稲田大学教授	作野誠一 博士 (学術) (金沢大学)
	副査 早稲田大学教授	川島浩平 Ph. D. (ブラウン大学)
	副査 早稲田大学准教授	佐藤晋太郎 Ph. D. (フロリダ大学)
	副査 大阪体育大学教授	原田宗彦 Ph. D. (ペンシルバニア州立大学)

研究の概要は以下のとおりである。

本博士論文は、夏季五輪スタジアムの大会後の有効利用を促進または阻害する要因を探るとともに、利用されないまま維持費ばかりがかさむホワイト・エレファント状態に陥らないために必要な要因を突き止めることを目的とした研究の成果をまとめたものである。オリンピックの開催都市にとって、五輪のために新設・改修した施設の維持管理は頭の痛い問題である。とりわけ、収容人数が通常6万人を超す夏季五輪スタジアムは、観客席を満員にできるイベントの需要に限られ、維持管理・修繕費も巨額に上るため、大会後の有効利用に苦しむケースが少なくない。これらの問題の原因を学術的に解明する試みとしての本論文は、定性調査と定量調査の組み合わせからなる二つの研究で構成されている。研究Ⅰおよび研究Ⅱの要約は以下に示すとおりである。

研究Ⅰ：五輪スタジアムの有効利用を促進・阻害する要因の探索

1972年ミュンヘン大会から2012年ロンドン大会までの10カ国11都市の夏季五輪スタジアムを対象に、個々の五輪スタジアムの建設と大会後の利用にまつわるエピソードの収集、フィールドワーク調査、関係者に対する半構造化インタビュー調査を組み合わせた定性的研究を実施した。その結果、有効利用を促進または阻害する要因として、①観客席の削減、②陸上トラックの撤去、③ホスピタリティ設備の充実、④独創的デザインと世界的な認知度、⑤近郊の競合スタジアムの存在、⑥至便な交通アクセス、⑦周辺地域の一体開発の成功、⑧五輪開催に向けた高額な建設・改修費、⑨所有者の悪い財政状況、⑩命名権販売、⑪集客力の高いテナントの存在、⑫テナントによるスタジアム運営の12項目が抽出された。この12の要因は、スタジアムの構造やデザインに関するもの、立地に関するもの、ファイナンスに関するもの、テナントに関するものに大きく4分類された。

研究Ⅱ：五輪スタジアムの有効利用を促進・阻害する要因の検証

夏季五輪スタジアムの有効利用を評価する指標として、観客動員数、稼働率（イベント開催日数を365日で割って算出）、スタジアム収支の三つを従属変数として採用し、研究Ⅰで抽出した12の要因を独立変数として、統計解析を行った。その結果、五輪スタジアムの有効利用を促進する因子として、①陸上トラックの撤去、②独創的デザインと世界的な認知度、③至便な交通アクセスの3項目が、有効利用を阻害する因子として、①近郊の競合スタジアムの存在、②周辺地域の一体開発の成功、③五輪開催に向けた高額な建設・改修費、④命名権販売、⑤集客力の高いテナントの存在、⑥テナントによるスタジアム運営の6項目が、そして、プラスマイナス両面の作用がある因子として、①観客席の削減、②ホスピタリティ設備の充実の2項目が確認された。「所有者の悪い財政状況」の有効利用に対する影響は確認されなかった。

さらに次のステップとして、「年間観客動員数が収容人数の6倍以下」、「稼働率が年間1.6%以下」、そして「スタジアム収支が赤字」の全条件を満たす夏季五輪スタジアムを「ホワイト・エレファント」状態と定義し、それを従属変数として統計解析を行った。その結果、ホワイト・エレファント化を促す因子として、①陸上トラックの撤去、②近郊の競合スタジアムの存在、③五輪開催に向けた高額の建設・改修費、④テナントによるスタジアム運営の4因子が、ホワイト・エレファント化を妨げる因子として、①観客席の削減、②ホスピタリティ設備の充実、③至便な交通アクセス、④所有者の悪い財政状況の4因子が確認された。これらの中で、事業計画段階で決定してしまう因子は、「五輪開催に向けた高額の建設・改修費」だけであった。

本論文のまとめとして、2つの研究を通しての議論を踏まえ、2020年東京夏季大会のために建設された国立競技場の後利用問題について、五つの提言が行われた。それらは、①五輪大会後に計画されている観客席の増席は行わない方がいいこと、②陸上トラックの撤去は、Jリーグクラブなど集客力の高いテナントの誘致が見通せない限り、行わない方がいいこと、③スタジアム命名権は導入しない方がいいこと、④民間事業者への運営委託は国立競技場の有効利用に対する特効薬ではないこと、⑤将来もし国立競技場にテナントを誘致する機会があればテナントにスタジアム運営まで委ねてしまわないことであった。

本研究は、維持・運営に苦しむ既存の夏季五輪スタジアムに利用促進の解決策の一端を示したとともに、将来の五輪スタジアムを選定または新設する際に施設の経済的持続性を踏まえた諸条件を提示したことに意義を有する。さらに、五輪スタジアムにどのような条件がそろえば中期的な「遺産（レガシー）」から長期的な「継承（ヘリテージ）」へとステージアップできるのか、その道筋の一端を示したことも評価に値する。

本研究は、当申請者が本研究科入学後に取り組んだ研究成果である。研究内容はスポーツ科学のスポーツマネジメントに関する学問領域における高度な専門的知識に基づいており、独創性と学術的意義を十分に有することが認められる。よって、本論文は、博士（スポーツ科学）の学位を授与するに十分値するものと認める。

なお、本学位申請論文の一部が掲載された学術論文および学術著書は以下のとおりである。

- Okada, I. & Greyser, S. A. (2018). After the Carnival: Key Factors to Enhance Olympic Legacy and Prevent Olympic Sites from Becoming White Elephants. Harvard Business School Working Paper, 19-019.

(第4章、第5章の一部(第2節、第3節))

- ・岡田功(2020)五輪レガシーの再生の試み: モントリオールとシドニーの五輪スタジアムを事例に. 経済地理学年報, 66(1), 73-89.

(第1章、第4章の一部(第2節の第2項、第8項))

- ・岡田功(2020)五輪スタジアム: 「祭りの後」に何が残るのか. 集英社新書.

(第1章、第4章、第6章(第3~5節))

以 上